

令和6年度「防災ラジオドラマ」シナリオコンテスト

知事賞(最優秀賞)「必死に愛せよ、日常」

脚本 松田 涼花

登場人物一覧

相川空(32)インテリア会社 社員	高橋夏生
佐々木さゆり(61)空の伯母	金野恵子
相川かおり(29)空の母・さゆりの妹	(台詞なし)
立川旬(25)空の同僚	斎藤晃一
レストラン店員	小泉まき
引っ越しスタッフ	村上龍太郎
ロープウェイアナウンス	♡

概要(200字)

伯母・さゆりの引っ越しを手伝うことになり、神戸を訪れることになった空。
そこで、29年前に阪神大震災で亡くなった母が遺したネックレスを受け取る。
母の思いも同時に知り、日常で精一杯だった空も、非日常に備えて防災し、母の思いを胸に、
長く安全に暮らしていこうと決める

空 「それでは、デザインの説明をお願いしますか」

旬 「はい。まずはキッチンなんですが、こちらの水栓レバーについて、上から押すと水が出るようにしようと」

空 「あ、その水栓レバーは」

SE:電話の音

空 「すみません、ちよつと電話に出ていいですか」

SE:電話の音が止まる

空 「ももも」

さゆり 「空ちゃん？引越しの日、一緒にごはん食べへん？」

空N 「伯母のさゆりちゃんからの電話。それは、私が生まれた街、神戸で食事をする誘いだった」

空N 「必死に愛せよ、日常」

SE:ガタツガタツとロープウェイが登る音

空 「この山の上にカフェがあるん？」

さゆり 「せつかく神戸まで来てくれるんやし、キレイな景色のところで飯食べよとおもって」

空 「ロープウェイから見える景色がもう綺麗やもん！ 雨予報やつたけど、晴れてよかった」

さゆり 「覚えてる？神戸の景色」

空 「私3歳やったし全然。だってお母さんのこともあんまり覚えてへんねん？」

空N 「1995年の阪神・淡路大震災で自宅が倒壊した時、私は3歳だった。一人で私を育てていた母は家具の下敷きに。私だけが、母の胸に抱きしめられて、命をとりとめた。全く覚えていないけれど、その時、母の頭には、当時箱型だったテレビが、そして足元には箆笥が降ってきていた。母の死因は、当時最も多かった自宅での圧迫死。私を抱きしめたのは、揺れが来て、とっさにとった行動だった」

さゆり 「東京の暮らしはどう？」

空 「毎日がいっぱいいっぱい。休みの日はずっと寝てるし、平日も遅くまで会社で働いて、帰ってきて寝るだけの生活してる」

さゆり 「そんな忙しい中、引越し手伝いに来てくれてありがとうなあ」

空 「ううん、さゆりちゃんは、私の大事な家族やもん」

空N 「家族をうしなつた私は、母の実家で、祖母とさゆりちゃんに育てられて大きくなった。さゆりちゃんは、私が大きくなるまで実家で暮らしながら、私の世話をして、定年まで会社で働いた。バリバリと仕事をこなすキヤリアウーマンだったさゆりちゃんは、私の憧れの女性だ」

空 「さゆりちゃん、はじめてのひとり暮らし？」

さゆり 「おばあちゃんは最後までしばらく病院やつたし、ここ数年は実家で一人で暮らしていたようなもんやけど」

空 「でも、自分で住む場所も家具も選ぶ暮らしは初めてやろ？」

さゆり 「そうやなあ。そう考えるとちよつと楽しみかな」

空 「仕事も辞めたから、好きな時間に寝て、好きなもの食べられるね」

さゆり 「なんか、中学生の夏休みみたいやなあ。でも、いつも仕事とか、おばあちゃんの世話で忙しくて大したもん食べてなかつたし、じつくり料理でもしてみよかな」

空 「良いなあ。私はまだ、仕事が忙しくてご飯作ってる暇もないから、この間送ってくれたインスタントラーメン、めっちゃ助かってる！ さゆりちゃん、私の好きな塩ラーメンいっぱい入れてくれるの、さすが」

さゆり 「小さい時から好きやったもんなあ」

空 「小さいときは、塩ラーメンに野菜乗せてよく食べたね」

さゆり 「コーンやらキャベツやら入れて」

空 「甘いコーンとキャベツに塩味がからんで、美味しいんよなあ」

さゆり 「ははは言いなから食べてた空ちゃん、懐かしいわ」

空 「今度ほうれん草も入れてみよかな」

さゆり 「でも、送ってる塩ラーメン、全部食べたらかんで。地震に備えて、保存食にも使ってたほしくて送ってるんやし」

空 「せやけど、部屋も狭いしそんな置いとけへんし」

さゆり 「忙しいのはわかるけど、」

空 「(遮って)防災っていえば私、インテリアの仕事してるやん？」

さゆり 「うん」

空 「最近新人が、キッチンに、上から押したらずっと水が出る水栓レバーを提案してきてさ」

さゆり 「ああ」

空 「だいたいのキッチンって、レバーをあげたら水が出るようになってるやん。それって阪神・淡路大震災からの教訓やねんで、知ってた？」

さゆり 「そりゃ知ってるよ。あの時、上から物が落ちてきて、水が出しっぱなしになってしもた家庭が沢山あったから」

空 「そういうの、業界の人でも知らなくなってきたるんやなって、ちよつときみしくなった」

さゆり 「今の形が当たり前になってるんやろな」

空 「当たり前になると、その形である理由が見えんようになる」

さゆり 「起ころんまま解決された問題は見えへんからねえ」

SE:「ゴゴゴン」ロープウェイが減速する音。

アナウンス 「まもなく、展望台に到着いたします。ロープウェイが止まるまでは、座席に座ってお待ち下さい」

SE:遠くで船の汽笛の音

空 N 「さゆりちゃんが予約してくれていたのは、神戸の街が一望できるレストラン。木々の向こう側には海。太陽の下、キラキラと輝く海の水面が、私の目に眩しく映った」

SE:風で木々が揺れる音と、遠くで波の音がする

さゆり 「30年も経ったらやっぱり、街も立派に復興してるな。あの頃と同じ。空と海、そして街」

レストラン店員 「こちらがランチコースのメインになります」

さゆり 「んー、いい香り」

空 「さゆりちゃん、連れてきてくれてありがとうございます」

さゆり 「実は渡したいものがあって」

空 「え？」

SE:ちりんちりん、と柔らかな鈴の音

さゆり 「これ、かおりが遺していったネックレスだな」

空 「お母さんが？」

さゆり 「引越しのために実家を整理してた時に出てきてん。綺麗な鈴がついてて、可愛い音がする」

SE:ちりんちりん、と鈴が鳴る

空 「きれいな音…」

SE:ちりん、と鈴が鳴る。

空 「あれ、これどこかで」

SE:カバンをガサゴソ探る音

空 「見て」

さゆり 「なにこれ」

空 「お母さんの結婚前の写真。せつかくやから持ってきた」

さゆり 「いやあ、懐かしいなあ」

空 「写真の胸元に注目。これも、これも。お母さんの若い写真、いつもこれつけてる」

さゆり 「ほんまや。すっかり忘れてたわ」

空 「どの写真も楽しそう」

さゆり 「空、自分の名前の由来知ってる？」

空 「空のように、表情豊かな美しさを持つ人になってほしい」

さゆり 「そう。実は空が生まれる前にもこのレストランにかおりと来て、その時に初めて空の名前の由来、聞いたんよ」

空 「へ？」

さゆり 「その時」空といつか、ここに来たい』って言ってた。かおりは、この神戸の空と海が好きで、この街に住み始めたから」

空 「そうやったんや。お母さん、お父さんと別れてから、毎日遅くまで働いて私の世話してたやん？」

さゆり 「うん」

空 「空とか海とか、毎日を楽しむ時間、あったんかな」

さゆり 「かおりは、空を産んでからずっと、幸せそうやったよ」

空 「仕事と育児の繰り返しで大変やったんじゃないかって」

さゆり 「かおりってさ、日常に楽しみを見つける天才やったの、覚えてる？」

空 「え？」

さゆり 「それこそ、塩ラーメンは元々かおりの大好物。塩ラーメンに入れて美味しい野菜、二人で一緒に色々試したわ」

空 「そうなんやー！」

さゆり 「ちなみにほうれん草も美味しいで」

空 「(うつとりした声で)やっぱり美味しいんや…！」

さゆり 「地震でなくなってもたけど、神戸にあつた育児日記には、『空が今日、自分で哺乳瓶を持ってミルク飲んだ』

『空が立てるようになった』って、ものすごいママに記録されてたんよ」

空 「見たかったなあ」

さゆり 「他にも、仕事終わりに飲んだ冷たい水が美味しかった、とかよう言うてたわ」

空 「まかいなあ!」

さゆり 「見逃しがちな、日々の美しさを知っている人やった」

空 「すてき」

さゆり 「空の名前だつて、かおらしい名前やと思わへん?」

空 「確かに。ウキウキしながら、愛おしそうに、空を見上げてたお母さん、思い浮かぶわ」

SE:ちりんちりん、と鈴の音が鳴る

空 「今日の空は…」

SE:雨音が落ちる音

空 「わ、雨降ってきた!」

SE:雨がザーッと振り始める音

空 N 「翌日。私は引越作業を手伝いにさゆりちゃんの新居にやってきました。陽がよく入る、明るい部屋。

ずっと実家に住んで、家族のために働いてきたさゆりちゃんが、初めて自分で選んで住み始めた部屋」

SE:インターホンの音。扉がガチャ、と開く。

引越しスタッフ 「引越し業者の者です。お荷物運び入れてもよいでしょうか」

さゆり 「はい」

引越しスタッフ 「シッドはどちらに置きましょつ」

さゆり 「えっと、シッドはこっち」

SE:ちりんちりん、と鈴の音

空 「さゆりちゃん、食器は棚に入れていくね」

さゆり 「ありがとう。そのネックレス、似合ってるなあ」

空 「そう？」

さゆり 「うん。そのネックレス付けてると、ますますかおりに雰囲気似てるわ」

空 「へ、なんか嬉しい」

引越しスタッフ 「次はテレビ持ってきます。寝室ですかね？」

さゆり 「はい、寝室で」

引越しスタッフ 「じゃ、さっきのベッドの枕元に置きましょうか」

さゆり 「それで(すね)」

空 「遮つて(まつて)。枕元はあぶないかも」

SE:ちりんちりん、と鈴の音

さゆり 「あ…そうね、枕元はあぶないか」

引越しスタッフ 「今は転倒防止のシールやベルトなんかもありますけど」

空 「もちろん対策しますが、でも、できれば少しベッドから離れたところ」

引越しスタッフ 「それじゃあ、少し離れたところに置かせてもらいます」

さゆり 「おねがいます。(少し間があつて)空ちゃん、ありがとうね。終わったらお昼によ」

▼引越しスタッフとさゆりが会話する声が、ぼんやり聞こえている。その声も、だんだん小さくなっていく

引越しスタッフ 「それでは、ありがとうございました！」

さゆり・空 「ありがとう(な)いました！」

SE:扉が閉まる音

SE:遠くで車が発信する音

空 「少し間があつてどうだろう。」

さゆり 「大丈夫、大丈夫。」

空 「やったー。」

SE:バタバタした足音

SE:パンと手を叩く音

さゆり・空 「いただきませーす」

SE:麺をすする音

空 「やっぱり二人で食べるなら塩ラーメンやね」

さゆり 「わざわざ買いに行かなくても、ストックしてるのあったのに」

空 「それは防災用って言ってたやん」

さゆり 「徹底してるなあ」

空 「東京帰ったら、私が備蓄してるラーメンも買い足す。防災リュックもつくさ」

さゆり 「急にどうしたん？」

空 「私、いつのまにか、心の中のどこかで地震を非日常って思ってた。でも、この間さゆりちゃんと話して、私って、お母さんがおらんくなつた非日常の延長線に生きてるんやって実感してん。それで、非日常なんてないんやって思ってた」

さゆり 「非日常なんてないって？」

空 「非日常っていうほど、非日常は特別じゃないうって感じた」

さゆり 「日常を大事にしたかおりの娘らしいね」

空 「いつか訪れる地震に対策することとは、可愛い食器を買ったり、お風呂にゆっくり入ったりするのと同じ、日常を愛する営みのひとつって…お母さんやったら言うかな」

さゆり 「言ってるやなあ」

空 「だからさゆりちゃん、必死に愛せよ日常！ やな」

さゆり 「えっなにそれ」

空 「日常は、非日常とは別で、普通にしていれば得られるものじゃなくて、必死に愛するものやねん」

さゆり 「ふふ、かおりよりも日常への愛が深いかも」

空 「お母さんも、いつもニコニコ見てるしな！」

SE:ちりんちりん、という鈴の音

さゆり 「私も、新生活を必死に愛していくか！」

空 「さゆりちゃんの新しい生活、応援してる。私、さゆりちゃんのためなら、いつでも駆けつけるから！」

さゆり 「ありがとう。かおりと空を思いながら、きちんと日常するね」

空 「いいやん！ 日常をきちんと守ってこそ、塩ラーメンが美味しいんやから！」

さゆり 「笑って）それも、塩ラーメン大好きなかおりが言いそうな台詞やわ〜！」

空M 「防災リュックを用意しよう、家具の倒壊に対策しよう、過去の教訓を知ろう、防災マップをチェックしよう。

どれも非日常に備えるためじゃない。来る災害に備えることは、大切な日常を愛するということなのだ」

空 「あーやっぱりほうれん草美味しい！」

さゆり 「私はやっぱりコーン派かな〜」

笑い合う、空とさゆり。